

ジュームズ・キャメロンという有名な映画監督がいる。手がけた作品には『ターミネーター』『アバター』そして『タイタニック』などがある。ジュームズ・キャメロン監督は、「完璧主義者」として知られている。

俳優への演技指導の細やかさや映画の編集段階でのこだわりはもとより、舞台セットの配置や小道具の製作にいたるまで、時間と労力を惜しむことなく自分自身で手を出して、納得のいく作品を創ろうとする。

一流のプロフェッショナルは、分野を問わず、共通の特徴として、こうした完璧主義者としての姿を持っている。

しかし、我々は、このような完璧主義者と評される人物を見ると、しばしばその才能を誤解してしまうように思う。物事の細部に徹底的にこだわる力、それが彼らの才能であると思ってしまうが、果たして、そうであろうか。

もし、完璧主義者と評される人物が、本当にすべての細部にこだわって仕事をしているならば、その人物は、健康を害してしまうのではないだろうか。これは、当然のことである。そうになると、完璧主義者は、もう一つの大切な才能を持っていることになる。

それは、こだわるべき細部とこだわらなくてもよい細部を見分ける力である。これこそが、完璧主義者の隠れた才能なのであろう。

これは、映画製作に限らず、いろいろな仕事にも当てはまる。どれもこれもすべてそつなくこなすことも重要である。そのためには、ある一定の能力が必要であらう。一方、すべてを高いレベルで完璧にやろうとするとどうなるか。きっと潰れる。その結果、どれ一つとして満足なレベルにはならないで終わる。

まじめなことはよい。だが、まじめすぎるのは考えものである。何事もほどほどに、バランス感覚が重要である。こだわらないというと、手を抜いているようにも思えるが、少し意味合いが違う。手を抜くということは、完成度が下がるということである。こだわらないというのは、それほどエネルギーをかけなくても完成度には影響がない部分があるということである。

実は、人というのは、どれも一生懸命取り組んだほうが楽な場合もある。余計なことを考えなくてよく、罪悪感もない。

ところが、プライオリティすなわち優先順位を考えたり、物事の軽重を考えたり、力のかけ所を考えると、容易には進まなくなる。ポイントがわかっていないといけない。エネルギーを費やすべきところがわかるので、完成度が上がるのである。物事には必ずポイントがある。

最初のうちは、どれもこれもすべて一生懸命やろうとすることはわるいことではない。そのうちに、ポイントがわかってくる。逆にいうと、一生懸命やったことがない人は、ポイントもわからない。

完璧主義者とは、とびきりポイントのわかる達人のような人なのだろう。確かに、映画館で観た『タイタニック』と『アバター』は、今でも鮮明に記憶に残っている。常人の創る作品ではない。もはや超人の域に達した人が世に送り出した傑作である。